教科等研究会（小・中学校特別支援教育Ⅲ部会）

令和６年度　研究活動のまとめ

１　研究テーマ

子どもの姿から出発する「分かる・できる」「楽しい」授業づくり
～一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～

２　研究経過

第１回			第２回			第３回			第４回		
6/7	20名	津森小	8/7	益城中央小	実践交流講話（Ｉ部会と合同）	11/19	益城中央小	事例検討	1/23	津森小	実践発表

３　研究の概要

(1) 研究の内容

○第１回

今年度の研究テーマの確認をして、研究の方向性を共有した。肢体不自由・病弱、難聴の２部会に分かれ、障がい種ごとの理事（まとめ役）を決め、学級の状況や悩み等を出し合った。第２回の講話の中で聞きたいことについてのアンケートも実施した。

○第２回

特別支援教育Ｉ部会と合同で研修を実施した。前半は３、４名の班別協議で各々の実践紹介をした。後半は、松橋東支援学校の小川俊郎教諭を講師として招き、「自立活動・進路について」の講話をしていただいた。

☆松橋東支援学校　小川俊郎教諭の講話より

①自立活動について

・自立活動の「内容」は、学習指導要領解説によると「人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素と障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素を検討して、その中の代表的な項目として六つの区分の下に分類・整理したもの」とあり、そこに含まれる「自立活動の６区分２７項目」、「学習上又は生活上の困難」についての説明があった。

・自立活動の個別の指導計画の作成の手順について、流れ図を使って作成する際の説明があった。実態把握には、個別の教育支援計画や個別の指導計画を活用するとよいとのアドバイスや具体的な事例を挙げての説明は、大変参考になった。

②進路指導について

・障がいのある生徒の学びの場について、特別支援学校は、どのような生徒を対象としているか、どのような内容を学ぶのか、進路先や卒業後の生活はどのようなものがあるのかの説明があった。また、高等学校の進路指導の取組も併せて紹介があり、二つを比較して考えたときに、どちらが適切かは、生徒の状況によって異なるとの話だった。

・進路指導における基本スタンスとして、子どもの幸せを願う姿勢、保護者とつながり、よりよい道を共に考えていく姿勢を持っていることが重要とあった。

○第３回

障がい種別の２部会で日頃の実践について紹介し、質問やアドバイスをし合った。また，肢体不自由・病弱部会は松橋東支援学校の小川俊郎教諭から、難聴部会は、熊本聾学校の斎藤尚美教諭から各会員からの質問に沿う内容の講話をしていただいた。

＜肢体不自由・病弱部会＞

・修学旅行について

広安小：２年生の時から先を見据えて町と交渉し、福祉タクシーを利用した。保護者と動画共有し、リアルタイムで連絡を取り合った。宿泊に関しては事前にショートステイ等利用して準備をした。

益城中央小：フィールドワークは、福祉タクシーを利用した。同じ日程で家族も長崎を旅行され、緊急時に対応できるようにされた。

益城中：バス、新幹線共におんぶして乗車し、自由行動も担任が一緒にまわった。医療支援の先生の夜間分の負担については課題が残る。

・交流学級での学習について

矢部小：発語がなく、視線を合わせるのも難しい児童だが、習字のとき「誰か一緒に書いてくれる人？」と募ると、たくさんの子が希望する。様々な形で子ども達をつないでいくことはできる。

・小川先生の講話より

① 知的障がいを併せ持つ場合の算数や国語の教材の紹介
② 医療的ケアの必要な子どもの学校生活をどう充実させていくか
③ 松橋東支援学校の紹介（施設、学習環境など）
④ 避難の時にエレベーターが使えない場合の移乗介助シートの紹介
⑤ 福祉サービス、進路について

＜難聴部会＞

・齊藤先生講話

① 聴覚障がい児の支援について
② 難聴疑似体験
③ 主体的に話をするコミュニケーション方法・練習方法

・幼児は、体験を通して親などの身近な人とコミュニケーションをする喜びを味わう。

・学校では、児童・生徒が友達と安心してコミュニケーションできるように、担任と一緒に気持ちを考えたり、どんな言葉で伝えるかを考えたりすることが大切。コミュニケーションは、人とのやり取りの中で育つもの。コミュニケーションの体験後のフィードバックも大切。

○第４回

障がい種別に３つのグループに分かれ、日頃の実践の紹介を行った。その後、全員研修として各グループの実践を紹介する時間をとり、情報を共有した。今年度の振り返りと次年度に向けてのアンケートも実施した。

(2) 成果と課題

①成果

○少人数のグループ協議は、話しやすく、悩みに対する具体的なアドバイス等も聞くことができ、即指導に役立てることができた。

○小学校、中学校それぞれの取組を聞くことで、先を見据えた指導の必要性が改めて分かった。

○日頃の学校生活での支援にとどまらず、修学旅行、見学旅行など学校外での行事に必要な支援、準備について協議できたことは有意義であった。

○講師を招いての講話は、学びの多いものだった。特に難聴部会での難聴疑似体験は、指導する側に必要な研修だという意見があった。

②課題

▲協議と講話のみで、実際に授業を見たり、実践を見たりすることができなかった。

▲それぞれの悩みに講師（専門家）からのアドバイスをもらえるとより学びが深まると思われる。

4　実践事例

＜肢体不自由・病弱部会＞

（1）嘉島西小学校

前年度から町と交渉し、視線入力ができる装置の購入が叶った。島根大学が提供している教材、自作の教材を活用し、体調を尋ねるやりとり、ミキサー食のスイッチ操作など本人の意思でできる活動が増え、学習活動の幅が飛躍的に広がった。

（２）益城中央小

斜視のある児童の見え辛さを解消するために、斜面台を製作した。読むとき、書くときで角度を変えることができ、児童の学習意欲の向上につながった。

（３）広安西小学校

自立活動「ゆらゆらパークであそぼう」は、歩行に困難を抱える児童を対象とした学習で、給食を自分で運ぶことを目標に、お盆に載せた食器に様々な大きさのボールやお手玉等を入れて運ぶ活動であった。運ぶものによって少しずつレベルアップするように工夫してあり、ゲーム性もあり楽しんで活動できる内容だった。

＜難聴部会＞

〇自立活動の内容について

・日頃からの会話が重要。会話の中で言葉の使い方などを学んでいく。人とコミュニケーションができた喜びが話そうという意欲につながる。

≪広安小の実践≫

・補聴器の使い方
・プールの学習
・夢に向かって（将来のことを考える）
・修学旅行に向けて（初めて会う人に自分のことを分かってもらうため）
・手話をみんなに知らせよう